卒業生だより

昭和 62 年卒
浅山　理恵

「黄金の３割」、そしてその先を目指して

1987 年卒業、男女雇用機会均等法施行直後、いわゆる「均等法一期生」としてキャリアをスタートしました。学生時代､当時の三重苦「女子･一浪･自宅外」である自覚も乏しく、劇団の裏方スタッフとして熱中していた私を拾ってくれたのが、本山ゼミの先輩がいた住友銀行（現・三井住友銀行）でした。体力はありそう､と踏んでくれたようです。女性採用のない企業も多く、優秀な女性は、公務員や師士族、外資等を目指すとされていましたが、私は自身の勉強不足を棚に上げ、男性と同じく企業で働き続ける選択は、かえって希少なチャレンジかも、と都合よく整理していました。

入社後は男性と同じが前提。厳しい時代でしたが、インターネットの黎明期で「進取敢為」の社風もあり、新しい企画を任されるのも楽しい。結婚後もあくせく働くうち、気づけば 30 代も半ば。いざ子供は？となると、人にも言えず悩むばかりでした。金融危機を超え、社会も会社も変わってきたと感じたのは新世紀に入ってから。高齢＆超高齢出産でしたが、幸い一男一女に恵まれました。その後、営業現場と人事や CX 部署など本社を行き来し、女性初の管理職ポジションや経営の役割の中で、人と組織について観察し考えるようになりました。

ジェンダーギャップへの取組は、自分事から仕事にもなり、いつの間にか社会課題ともなりました。確かに活躍する女性は増え、世の中は進んできてはいます。が、均等法成立から早や 40 年、そして人口減少も進む我が国では、課題の相対的な重要度は大きくなる一方とも感じています。

入学時、女性は 200 人中 12 人（６％）、共学校出身の私も「京大だし」とそう気にも留めず、会社同期 400 人超の 18 人（４％）も、「そんなもの」と受け止めていました。仕事も人生も経験を重ねた今は、「なぜこうなのか？」スルーせずきちんと向き合い、シンプルに考えることが大切だと思っています。

ノーベル賞でジェンダー格差がフォーカスされる等、経済はじめ多くの分野で真因究明が進み、解決アクションへの示唆も出てきています。様々な組織で皆が知恵を捻り、まずは「黄金の３割」を超えてみることで、見えてくる世界や実現できるイノベーションもあるのではないでしょうか。私ももう暫く企業活動や京大「ここのえ会」等のネットワークを通じて、そして親としても次世代への貢献を果たしていきたいと考えています。

＊ここのえ会＝京大同窓会 HP ご参照

平成 15 年卒
山本　典正

日本酒業界と私

和歌山県の酒蔵の長男として生まれ、中高は智弁学園和歌山高校で応援団員として鍛錬をつみ甲子園で応援をする機会に恵まれました。2003 年に京都大学経済学部経営学科を卒業しましたが、在学中は麻雀ばかりの不真面目な学生生活を途中まで送ってました｡これではだめだなと漠然と思っていた頃に坂出健教授のゼミの末席に加えていただくことができ、それをきっかけに一念発起をし学業に向き合い充実した学生生活となったのを記憶しております。

早くから経営者になることに関心があったため大手金融や商社などに就職を決めていく同級生が当時は多い中でベンチャー企業への就職活動を行い、東京の人材系ベンチャー企業にお世話になりました。

社会人の「いろは」と起業家精神を学びましたが、家庭の状況もあり 20 年前に平和酒造に戻ることに。 起業を夢見ていた私としては志半ばに東京を去ることに「都落ち」の言葉が頭をかすめなかったわけではありません。

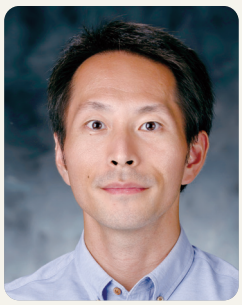
1972 年をピークにして約 20％にまで衰退している斜陽産業の日本酒業界ですが、廉価品の日本酒がメインだった弊社は経営課題が当初多くありました。

「紀土」という高品質ブランドを立ち上げ国際コンペでグランプリに輝くなど対外的な評価をいただき売り上げを 4 倍近くにまで成長、高付加価値商品が製造のほとんどを占める状況に近年はなりました。

また若い醸造家の育成に注力をし、『個が立つ組織』（日経 BP）を始めこれまでに 3 冊の著書を出版するなど組織づくりで注目をいただけるようになりました。これも在学中の学びや社会人時代の経験が大きかったように思います。

東京・兜町にブルワリーパブスタイルのどぶろく醸造所を 2022 年開業しましたが今年 4 月、大阪・難波にも二店目となるどぶろく醸造所を開業するなど日本酒の可能性を広げる活動をしています。

20 年前に夢破れて実家の酒蔵を継いだ私ですが、在学中に考えていた以上に日本酒業界に将来性を感じています。現在弊社の海外輸出割合は 25％、衰退マーケットにとどまるのでなく成長マーケットの中で業界のパイ全体を増やしながら自分たちも成長していく。そのような志を持ち続け一歩一歩進んでいきたいと思います。



平成 24 年卒
青　野　　諒

自分だからできること

卒業後総務省に入省して以来十年ほど、地方行財政を中心に様々な経験をしてきました。ここまではよくある話ですが、その後の私のキャリアは少し独特で、現在は総務省を退職しカリフォルニア大学サンタバーバラ校にて経済学博士課程に在籍する大学院生をやっています。言わずもがな研究に自律は不可欠でありますが、自由で広大な海の泳ぎ方は京大で学び得た大きな財産の一つであり、ともすれば溺れてしまいそうな私を日々支えてくれています。

転向のきっかけは、サンフランシスコでの在外公館勤務にて米国経済の力強さを目の当たりにしたことでした。日々刻々と変化し成長をもたらすシリコンバレーのエコシステムは、日本のそれとあまりにも異なっていました。このことは、私に相当な焦燥感を覚えさせると同時に、その好奇心を大いに掻き立てました。この差は何によってもたらされ、如何なる帰結を生むのか。政策はどう関与すべきなのか。考えるうちに、政策実務の一端を担ってきた人間が腰を据えて研究してみるのも面白いのではないかとの想いを抱き、遅まきの進学を決意するに至りました。修士号を持たない自分が、家族を養いながら博士号を取得するにはどうすればよいか。米国の経済学博士課程は修士博士一貫教育で学費と生活費を支給してくれると知ってから、学部ゼミの恩師である諸富徹先生をはじめ各方面の方々にお力添えをお願いし、できるだけ多くのプログラムに出願しました。そうして運良く現在の所属に拾っていただいた次第です。

今、米国は大きな変化の中にあります。賛否両論あり、また、これが一過性のショックであるのか、長期的で内生的なものなのかも判然としません。しかしながら、政策や環境の変化は、いずれ数字として現れ、良くも悪くも新たな分析材料をもたらします。この時に、理論に立脚しつつ現場レベルでの影響に思いを馳せる、自分らしい視点を大切に物事を見極めていきたいと思っています。

平成 31 年卒
村 上　彩 子

Enjoy yourself!

大学卒業後、地元神戸のデザイン企業に就職。業務の 1 割は、会社の本業である紙媒体の編集対応。残る 9 割は、私が学生時代、インターンとして参画していた新規事業「コワーキングスペース」のコミュニティマネージャー (運営責任者)。主な業務は、日常のスペース運営、経理、週 1 で開催するイベントの企画、営業、HP の更新、3 媒体の SNS 運営、インターン管理、その他会員様とのやり取り等々。実に多くの業務を、凝縮して経験させていただいた。

また、当時スペースに入会されていた皆様は、起業家、経営者、公務員、士業従事者、デザイナー、ライター、大手企業会社員、と業種も多岐にわたり、私の思考力に多大な影響を与えていただいた。

その後、転職。生まれ育った街が大好きで、この地から発信される新しい物事に携わりたいという思いは変わらず、神戸本社の企業へ。インターネットを介し、全国の施工店と連携しながら、エクステリア (外構工事 / 外壁塗装) の販売、施工をおこなう、デジタル×外構の世界へ足を踏み入れた。

営業、販売企画等、入社後、数多くの部署と業務を経験させていただいた。現在は、営業課ならびに外壁課の筆頭課長として、マネジメント業務をおこなっている。

世の中に「ハウスメーカー」と呼ばれる会社は多々ある。だが、未だ「ガーデンメーカー」と呼ばれる種類の会社は無い。

今、私は「ガーデンメーカー」を目指す会社で、進化のド真ん中にいられる幸せを感じている。自分にできることを見つけ、挑戦し、笑顔があふれる住空間の提供者とは何か、という永続的なテーマに向き合いたいと思っている。

大学時代は、素敵な仲間と、生来の特技 / 趣味である、スポーツや音楽に没頭し、そして多くの土地へ旅行に出かけ、よく遊び、よく行動し、そして、多分、少しは…勉強した。

「現地現物主義」「高密度運営」を 2 大信条とする田中ゼミに在籍し、フィールドワークを通じて、たくさんの企業に赴き、現地の声を見聞きし、考え方を学んだ時間は、有意義だったと思い起こす。

京都大学といえば「自由」の 2 文字というイメージは今も昔も健在かと思う。

私にとっての「自由」とは、無限にある正解の無い回答のうち、どれを選択しても、自己責任で、楽しみながら進んでいくマインドの源である。

私は、これまで関わってくださったすべての方々、さまざまな経験に対する感謝の気持ちを忘れず、そして今後、新たに出会う人々、得られる経験に、真摯に向き合い邁進できる、そんな自分自身でありたい。